様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年５月３０日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2009～2012
課題番号：２１７２００４４
研究課題名（和文）　二重帝国における音楽のナショナリズムと民族誌研究—ハンガリーの事例を中心に
研究課題名（英文）　Musical Nationalism and Ethnography in the Dual Monarchy (particularly in the Hungarian part)
研究代表者
太田　峰夫（OTA MINEO）
東京大学大学院・人文社会研究科・研究員
研究者番号：00533952

研究成果の概要（和文）：
本研究では伝統音楽が19世紀中欧におけるナショナルな文化アイデンティティの確立にどのように寄与したかという問題を、19世紀ハンガリーの市民社会において、伝統楽器ツィンバロンがどのように受容されたかというトピックを中心に調査した。そのかたわら、民族誌研究がハンガリーの藝術音楽の展開にどのよう役割を果たしたかというトピックについても、バルトークの事例に則して考察した。研究の成果をもとに論文（査読有）３本を発表したほか、海外での２回をふくめ、計６回にわたって学会発表も行った。

研究成果の概要（英文）：
In this project I examined how legacies of traditional music served as resource of cultural nationalism in 19th-century Central Europe, especially in the Hungarian part of the Dual Monarchy. In the framework of this project I concentrated on two topics: Reception history of the cimbalom and examination of Bartók's methodology in the field of ethnomusicology. Based on the consequences of this research project I read 6 papers on various occasions-including two for international conferences-and contributed 3 papers to academic journals.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	700,000	210,000	910,000
２０１０年度	500,000	150,000	650,000
２０１１年度	500,000	150,000	650,000
２０１２年度	500,000	150,000	650,000
総　計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：芸術学・芸術史・芸術一般
キーワード：音楽学、ナショナリズム研究

１．研究開始当初の背景

本国ハンガリーはもちろんのこと、西欧諸国や日本においても、ハンガリー音楽史研究はともすると バルトークやコダーイのような「ナショナル・ヒーロー」の業績の顕影に終始しがちなところがあった。国際的に見ても、「民謡」や「民族楽器」といった文化資源を、当時の人びとがどう捉えていたか

という点から音楽史を捉え返そうとする試みは当該研究領域においてまだ少なかったと言える。そこで、近年の聴覚文化論研究や他国のナショナリズム運動に関する研究を参考にしつつ、申請者はこれまでなされてこなかった角度から、ハンガリーの音楽のナショナリズムについて、研究してみたいと思い立った。

２．研究の目的

本研究の目的は、二重帝国時代 (1867～1918年)の中央の民族集団が近代化を目指しつつ、文化ナショナリズムの戦略をそれぞれどのように展開していったかを、主にハンガリーの事例に即して明らかにしていくことにある。その際、とりわけ伝統音楽や伝統音楽研究が、当該地域の文化アイデンティティの確立に理論・実践の両面においてどのような貢献を果たしたかという点を申請者は本研究において解明しようとした。

具体的なトピックとして申請者は、「国民楽器」ツィンバロンのハンガリー市民社会における受容史研究とこの時代のハンガリーの（とりわけバルトークによって行われた）民謡研究の社会史的背景の解明に取り組んだ。これらのトピックは国際的に見てもまだあまり注目されていない研究課題だが、それらに取り組むことを通して、①ハンガリーの市民階層の間で、「民俗音楽」や「民謡」への美的関心がどのように形成されていったか、②世紀転換期のハンガリーの音楽のナショナリズムがどれだけ多様な展開を見せていたか、および③どのような点においてそれは他の国々の ケースと類似し、どのような点において特殊だったのか、といった問題を明らかにするというのが申請者の目論みだった。

３．研究の方法

本研究にとってさしあたり重要だったのは、バルトークやコダーイのような「大作曲家」の創作活動に必ずしも直接関係しないレヴェルにおいて、ハンガリーの音楽のナショナリズムを論じることだった。

そこで、本研究ではまずもってツィ ンバロンをはじめとする伝統楽器の「改良」・「近代化」の事例に注目するところから始めた。というのも近代化と「伝統保存」との間のジレンマがそこに集約されており、他国のケースとの比較もしやすいと見込まれたからである。コダーイは 1926 年にはじめて自らの作品（歌劇《ハーリ・ヤーノシュ》）でツィンバロンを用いているが、この「国民楽器」の「改良」はそれより数十年も前か ら始まっている。そこでその時点において、どのようなことが目指されていたかを、当時の音楽ジャーナリズムなどをもとに考察した。

具体的には、ブダペストのセーチェーニ国立博物館、ハンガリー科 学アカデミー音 楽学研究所、リスト 音楽院図書館、同音楽院文書室、バルトーク・アーカイヴ、サボー・エルヴィンブダペスト市立中央図書館などで一次資料・二 次資料の収集を行なった。さらに、デブレツェン（デブレツェン大学図書館）やケチュケメート(コダーイ研究所)のような地方都市でも一次資料を収集し、情報源がブダペストのみに偏 ら な いよう、バランスをとった。

必要な資料が、いつも芋づる式に出てくるとは限らない。例えば 1918 年以前の「宗教及び一般教育省」の公文書は 1956 年の火災で、そのほとんどすべて(九割五分以上)が焼失してい る ので、本研究課題が問題にする時期のハンガリーの文化行政について、包括的な研究 を行うことには無理があった。そこで、こうした不便さに対応する意味もこめて、本研究ではあまり「総花的」なスタイルにこだわらず、比較的まとまった資料が残 っているトピックを起点にして、ケーススタディを積み重ねていく手法をとることにした。

４．研究成果

（１）「国民楽器」ツィンバロンが 19 世紀ハンガリー市民社会において果たした役割について、いくつかの重要な事実が明らかになった。すなわち、

①非ロマの市民達はロマの楽師のツィンバロン演奏に一方で違 和 感 を覚えつつも、教育メソッドや演奏スタイル、楽器の構造を西洋化・近代化することで、自分達の「近代的」かつ「国民的」な文化アイデンティティの形成にこの楽器を役立てた。

②ツィンバロンの受容の向こう側にある大きな問題として、そもそもロマの音楽文化を「ハンガリーの音楽文化」として受け容れるか否か、という点について当時のハンガリー知識人の間にはある種のアンビヴァレンツがあった。

③ペダルを装備したかたちへと近代化された結果、ツィンバロンはサロンの楽器として中間層の女性達の間でも好まれるようになった。この楽器が当時「国民楽器」として知られていたことから考えるならば、ツィンバロンが当時まだ参政権を持たなかった女性達のマジャル化、「国民化」のための装置としても機能していた可能性は十分にある。

④19 世紀末から 20 世紀初めのハンガリーの音楽学校につくられた「ツィンバロン科」の年報や学生原簿を調査した結果、女子だけでなく、非マジャル系の生徒達もまた、ツィンバロンの習得に熱心だったことが明らかになった。つまり、19 世紀 末のハンガリーにおいて「国民楽器」ツィンバロンを演奏していたのは、むしろ女性や非マジャル系の

人々のような、ハンガリー社会 の「周縁」に位置する人々だったということになる。
以上のような知見をもとに、申請者は査読論文２本を発表し、口頭発表５回（イギリスとイタリアでの発表も含む）を行った。なお、王立音楽院ツィンバロン科の学生原簿に関する調査については、近いうちにさらにもう一本、論文を発表する予定である。
（２）民謡研究と文化ナショナリズム運動との関わりについては、ハンガリーの民謡研究で積極的に使われたフォノグラフという録音メディアが、そこでの民謡研究の性格をどこまで条件づけたかというトピックを中心に調べた。
その結果、少なくともバルトークの場合は、文化ナショナリズムというよりは、彼独自のモダニズム的な民謡観を--それによるとハンガリーとその周辺地域の民謡は単に藝術的価値が高いばかりではなく、従来の藝術音楽にはなかった「新しい」様式的特徴をも持つものなのだが--補強する装置として重要な役割を持つことが明らかになった。これについても申請者は査読論文を１本発表し、学会発表を１回行った。
（３）以上をまとめつつ、研究成果の内外へのインパクトや今後の展望について述べておく。ナショナリズム研究の領域全般へと視野を広げるならば、（１）と似た問題設定の研究はないわけではない（たとえば福田宏によるチェコ体操運動の研究が頭に浮かぶ）。（２）についても、近年聴覚文化論研究の文脈でフォノグラフが民族誌研究に与えた影響のことがしばしば言及されるようになってきているので、広く見渡せば、先行研究がまったく存在しない状況でもない。しかしながら、ハンガリー音楽研究の分野において、同じようなテーマ設定のケーススタディがこれまでなかったのは事実であり、その意味で本研究において申請者は、近年の文化研究の新しい方法論を従来のハンガリー音楽研究に接続する仕事を一応果たせたと考えている。また、日本国内の文化研究の状況に照らしても、ここまで一つの地域の音楽文化をナショナリズム運動やメディア状況と関連づけて論じた研究は少ないので、その点から考えてもそれなりにインパクトのある仕事を残せたのではないかと思う。
とはいえ、本研究課題で取り組んだトピックがいずれもさまざまな問題系と複雑にかかわるものであり、論文３本程度ではとても語り尽くせないものだったことは確かである。今後は、さまざまな他国（とりわけチェコやポーランドなど、二重帝国に属していたほかの地域）の事例との比較など、「脇を固める」作業を深めつつ、いずれは単著のかたちで、研究成果をまとめられるよう、努力したい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
①太田峰夫、記譜法の変化と「南東ヨーロッパ共通の特徴」の創造―バルトークの民謡研究におけるフォノグラフの役割について―、『美学』（美学会）、査読有、第 61 巻第 1 号、2011、pp. 121-132（ http://ci.nii.ac.jp/naid/110009480217）.
②太田峰夫、19 世紀後半のハンガリーにおけるツィンバロン教育の近代化と「民衆音楽家（“népzenész”）」批判―ツィンバロン教師アッラガ・ゲーザの議論を中心に―、『民族藝術』、査読有、第 28 号(民族藝術学会)、2012、pp. 125-132.
③太田峰夫、ツィンバロンはいかにして女性の楽器になったか――１９世紀後半のハンガリー市民社会におけるツィンバロンの受容史について、『文化資源学』（文化資源学会）、査読有、第 10 号、2012、pp. 23-34.
〔学会発表〕（計６件）
①太田峰夫、記譜の精密化と「プリミティヴなるもの」の「創造」―バルトークの民謡研究におけるフォノグラフの役割について、2009 年 10 月 12 日、第 60 回美学会全国大会（東京・東京大学）
②太田峰夫、From Csárda to “Family Circle” ― On the Reception History of the Cimbalom in Turn-of-the-Century Hungarian Society、2010 年 7 月 17 日、RMA Annual Conference (The University of London, London, イギリス)
③太田峰夫、19 世紀ハンガリーにおけるツィンバロン教育の体系化と「民衆音楽家(népzenész)」批判　～ツィンバロン教師アッラガ・ゲーザの演奏論を中心に、2011 年 2 月 26 日、民族藝術学会第 121 回例会（京都・京都国立近代美術館）
④太田峰夫、ツィンバロンはいかにして女性の楽器になったのか――１９世紀後半のハンガリー市民社会におけるサロンの「ハンガリー化」について、2011 年 10 月 9 日、東欧史研究会 2011 年度個別研究報告会（東京・学習院女子大学）
⑤太田峰夫、How did the Cimbalom become an Instrument for Women? ― on the Reception History of Cimbalom in late 19th-century Hungarian Bourgeois Society、2012 年 7 月 6 日、IMS2012 ″Musics, Cultures, Identities″ (Parco della Musica, Rome, イタリア)
⑥太田峰夫、ツィンバロン科の生徒達はどこからやってきたのか――音楽学校の

学生原簿から見た１９世紀末ハンガリーのナショナリズム運動、2012 年 11 月 24 日、日本音楽学会第 63 回全国大会（京都・西本願寺聞法会館）

〔図書〕（計　０件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　０件）

○取得状況（計　０件）

〔その他〕

特になし

６．研究組織

(1)研究代表者

太田峰夫

東京大学大学院・人文社会研究科・研究員

研究者番号：00533952